

丘の上の鳩舎

——レーモン・ジャンとの一日——

杉 山 毅

約束の日の前日、ぼくは10数年ぶりにマルセーユのサン・シャルル駅に降り立った。この古い港町にも数年前から地下鉄が動き始めていることを聞いていたぼくは、早速、パリのメトロとは比較にならぬ真新しい車両に乗りこみ、ヴィユ・ポールまで出る。見覚えのある河岸を散歩しながら、聞えてくる人びとの会話のミディ訛りに思わずぼくの表情はゆるみ、いま自分が確実に南仏の町に来ていることを実感する。

カヌビエール大通りに近いとあるホテルに投宿したぼくは、その夜、レーモン・ジャンに電話を入れた。——サン・シャルル駅発9時22分か、その次の11時33分発にしようかと思うのですが。——9時22分のに乗れるでしょう。疲れていないのなら、早い方がいい。その列車なら9時55分にエクスに着くから、10時に私が駅まで迎えに行くよ。

多忙な彼に迷惑をかけるのは本意ではないので、少しでも会えればそれでよいのだから、あまり無理をしないしてほしいと念を押すと、遠慮はいらない、明日は一日きみのために用意しているのだから、とこちらの懸念を吹き消すような元気な声が、受話器の向うから返ってきた。

翌朝10時、ぼくはエクス駅の待合室にいた。四・五分遅れて現われたジャンパー姿のレーモン・ジャンは、駐車に手間どって失礼したと断りつつ、駅前の道路にぎっしり並んだ自動車の列を指さした。

朝食は？ すませました。それでは早速町を案内しよう。ご存知のように大きな町ではないから、さほど時間はかからないが。

エクスは始めて訪れる町ではなかった。じつは、10数年前の8月末、ニースの夏期大学でひと夏を過してパリへの帰路、この町を文字通り駆け足で通り過

きたことがあったからだ。その頃、ぼくは思わぬめぐり合せでガブリエル・リュシエの *Lettres de Prison* (Seuil, 1970) を翻訳する仕事をかかえていた。ご存知の向きもあると思うが、不幸な運命を辿ったこのリセの女性教師はレーモン・ジャンの教え子のひとりであり、しかも彼女が残した書簡集の編者は他ならぬ彼自身で、彼はこの書簡集に《ガブリエルのために》と題する長文の追悼文を書いていた。当時のぼくは、レーモン・ジャンが何者なのかほとんど知るところはなかったが、この翻訳の仕事を通して、かつての教え子に対する彼の情理を尽した哀惜の文章に非常に感心し、つよく心を打たれていた。

翻訳の過程で、いわゆるガブリエル事件なるもののあまり知られていない細部の事実や、彼の文章に登場するいくつかの固有名詞に戸惑うことの多かったぼくは、当時たまたま滞仏中だったという気安さも手伝って、レーモン・ジャンに手紙を書いて教を乞うた。思えば、これがきっかけで以後の彼との文通が始ったわけだが、折悪しく、彼はその夏カナダに出かけていてエクスには不在だった。ところが幸いにも、家族の方が手紙を転送してくれたのであろう、モンリオールの滞在先から彼は懇切な返事を届けてくれた。そういうわけで、ぼくはしだいにこの教師兼小説家に関心と好意を寄せ始めていた。だから、マルセユで一泊し次の日アヴィニオンに向う移動の日の数時間を費し、レーモン・ジャンやガブリエルと深い関係をもつエクスの町を、少しでも見ておきたいと思ったのである。

駅前から散策を始めたぼくたちは、鬱蒼とした木立ちの下のミラボー大通りを渡り、やがて市役所に近づく。その前を、10数年前のぼくは足早やに通り過ぎていっただけの記憶があるが、この日、彼は市役所の内庭にぼくを誘い、さらに内部へと通じる鉄格子の門を示して、それが金具工芸の逸品であることを教えてくれた。ついで、そこからさほど遠くないサン＝ソヴール寺院まで足を運ぶ。そこでも、彼の先導で寺院横のややさびれた内庭回廊を一巡する。10数年前とは異なり、いまやレーモン・ジャンの小説の愛読者のひとりとなってしまうぼくは、この回廊が彼の名作 *La Fontaine obscure* (Seuil, 1976) の舞台のひとつだったことに思い当る。彼の説明によれば、この回廊は事件のあつた17世紀初頭の面影を、ほぼそのまま、いまに伝えているという。

そこから、さらに北に向って、ジョレス通りを横切り、北西の方向へ少し歩き続ける。ここまでくると、早くも町の中心部からはずれることになるのか、

心なし人影もまばらだ。近年この界隈にアラブ人たちが多く住みつくようになった、マルセーユの人口もその過半数はいまやアラブ人だ、とレーモン・ジャンが語る。彼が *La Ligne 12 (Seuil, 1973)* を書いた動機が、こういうところにあるのかもしれないとぼくは想像し、あの作品に登場した出稼ぎのアルジェリア人労務者の痛ましい物語を思い浮かべる。

彼が案内してくれたのは、この界隈に位置するタイルの敷石をしきつめた小さな殺風景な広場だった。その広場を囲む道路の一角が腰の高さほどの石塀となっていて、そこに大きくはめ込まれた次の一文が読みとれた。

J'ECRIS TON NOM LIBERTE.

ぼくの心に爽やかな感動に似たものが走る。わざわざここに案内してくれた彼の気持が伝わってくる。なぜなら、彼のこれまでの歩みは自由の擁護と切りはなせないからだ。

折しも、この石塀の近くは日溜りになっていた。そのせいか、そこに数人の人たちがたむろしていた。浅黒い肌の色からみてアラブ人のようであった。それほどの老人たちとも見えない。どうやかかれらが 無為にそこで過しているらしい光景をしばらく見ていると、石塀の一文のさいごの言葉が、急に小さく弱々しく見え始め、少し複雑な気持ちにとられる。かれらにとつて、いかなる「自由」が存在するのだろうか。「自由」は、かれらに何を意味しているのだろうか。

その日は九月初旬の土曜日だった。今日は市の立つ日だから、こんどは賑やかなところに案内しよう、と言うレーモン・ジャンについて歩く。行きついた先は、市役所の東 200メートルぐらいに位置する「説教者たちの広場」。そこから裁判所前のヴェルダン広場はひと続きでかなりの広さだ。この日、そこには色彩豊かな果物、野菜、花々、チーズ、バター、卵などの出店がところ狭しと立ち並び、持ち込んだ品々をひろげていた。その周辺に週末を楽しむ多くのエクソワたちが溢れている。ぼくたちもいくつかの出店を見て廻る。そして、サント・マリ教会の近くまで来たときのことだ。あの樹のあたりだよ、ルイ・ゴフリディが焚刑に処せられたのは、とぼくの案内者が教えてくれる。1710年、「ほんの少し人生を愛しすぎたばかりに悪魔に魅せられた罪人として裁かれ」火焙りにされたゴフリディの姿を、いまこの市に集う平凡な人たちの姿に重ねてみる。そしてレーモン・ジャンの指さすプラタナスの大樹を、ぼくはしばらく

く眺め続けた。

やがて広場の雑踏をかき分けるようにして、再び緑深い木立の下のミラボー大通りに戻る。名前は忘れたが、一軒のかなり大きなカフェのテラスで一休みする。ぼくの記憶に間違いがなければ、狭いクレマンソー通りとミラボー大通りの角にその店は位置していた。一昔前まで、そこはエクス文人や芸術家たちが集り、議論や雑談を楽しんだところだそう。ぼくたちもしばしの歓談を楽しむ。そのときのことだが、1720年のマルセーユのペストを扱った *L'Or et La Soie* (Seuil, 1983) の評判がよく、最近、日本からもその読後の印象を知らせてくれた読者がいた、と彼は嬉しそうに話していた。(後日判ったことだが、この日本人読者とは早大名誉教授の河合享先生のことである)。

昼食の用意をしている家内が待っているだろうから、とぼくを促し、エクス駅の方向へ下る。途中、「水の都」エクスの象徴のひとつ *La Fontaine des Quatre Dauphins* に立ち寄り、ゾラとセザンヌがともに学んだ学舎(現在は *Lycée d'Etat Mignet* となっている建物)の側を抜けて駅へ向かう。

駅前に駐車してあった彼のフィアットを駆って、ぼくたちはこの町の北の丘陵地へ向かう。途中、低い丘を一度登り降りした後、車は再び別の斜面を登り始め、丘の七・八合目あたりでとまる。降り立つと *Le Colombier* と書かれた粗末な板切れが目にはいった。「鳩舎」を意味するこのフランス語は、彼との文通を通じて、すでにぼくにもなじみとなった地名だ。聞けば命名者はレーモン・ジャン自身とのこと。この場に来てみて、ぼくはなるほどと感心する。周囲に直接の隣家といったものはなく、数10メートルおきに、赤い屋根の家々が樹木の合い間に見え隠れしている。

「鳩舎」の前に立って振り返って見る。いましがた車で通って来た低い窪地をはさんで、前方にもなだらかな起伏が続き、そこにも人家が点在している。空の青、丘をつつむ緑、家屋の存在を示す茶、黄、赤。南仏特有の明るく輝く太陽。(前日パリからヴァランスまでは曇り空だった。) まさしく色と光の洪水がそこに広がっていた。傍らのレーモン・ジャンがエクスの町はあの丘の向う側だ、とぼくが見とれていた方向を指さす。思わずぼくは、月並だがお世辞ではなく、いい所ですね、と言い、セザンヌの風景だ、と言わずもがなの陳腐な印象まで口にしてしまう。

入口の扉を開けて小柄な婦人が、ぼくを出迎えてくれる。敷居をまたぐと、

そこに20畳ぐらいの空間が広がっていた。片隅に本棚と応接セット、小さなテレビ、やや離れて食卓と数脚の椅子。壁にかけられた二点の淡彩の風景画の他にさしたる装飾品は見当らない。簡素なたたずまいだ。居間兼応接間兼食堂といったところだろうか。

レーモン・ジャンがぼくに家族を紹介してくれる。先程の小柄な婦人が糟糠の妻ジョルジェット夫人。胃病が癒えたばかりというせいか、まだあまり顔色はよくない。けれど、お元気そうに見える。少し褐色の混ったブロンドでジーンズ姿のよく似合う娘さんは末娘のシルヴィ。エクス大学で演劇を勉強中とか。将来は舞台女優をめざしているという理知的な美しい娘さんだ。そして長男のレミ。レーモン・ジャンが *La Singularité d'être communiste* (Seuil, 1979) の扉に à Rémy と書いていた息子さんだ。68年5月、ゴーストの運動に参加していた彼も、政治の季節が過ぎ去ったいまはX線の技師となり、同じ職場で働く看護婦さんと結婚し、すでに二児の父となっている。若い彼の奥さんは、この日、当直の仕事で来れなかったが、彼は二児をともなって両親の許に姿を見せていた。赤いトレーニング・ウェアを着用した彼は、さしずめ中学か高校の体育の教師のように見えた。長女のマリオンは少し離れたところにいるので、とレーモン・ジャンはつけ加えて家族の紹介を終わる。一家をあげての歓迎にぼくは深く感動する。

アペリティフのひとつき、この家の主人は片隅の本棚にぼくを招き、笑ってはいけないよ、と断りつつ彼自身の著作集とその反響を示す翻訳本などを収めた棚を示した。見れば、いくつつかある諸外国での翻訳本に混って、入沢・井村両氏の訳になる『ネルヴァルー生涯と作品』がある。その傍らに拙訳のガブリエル・リュシエ『愛と死の手紙』(*Lettres de Prison* の邦訳題)ばかりか、ぼくがフランス語読本教科書として編んだ *Hélène et les oiseaux* まで並べられている。それを見て、どうしたわけか、思わずぼくは苦笑してしまう。〈ヌ・リエ・パ〉という彼の前言を、つい忘れてしまっていた。

数ある諸外国の訳本の中に、*La femme attentive* (Seuil, 1974) の中国語訳を発見して少し驚く。——『沈思黙想的な女人』——中国語のできないぼくでも、それとすぐに見当がつくのは、同じ漢字文化圏に属するありがたさと言うべきだろうか。しかし、どちらかと言えば、比較的軽い風俗小説ふうの筆致で書かれたこの小品が、どうして中国語に訳されているのだろうか。さり気なく、こ

の疑問を彼に打ち明けてみる。自分にも分らない、自分が意気込んで書いた野心作（たとえば *Deux Printemps* や *Photo souvenir*）は概して評判が悪く、逆に軽い気持で書いたものが、なぜか世間では受けているようだ、と言ってこんどは彼が苦笑した。

その棚の隅に、ひとりの若者の写真が置かれていた。次男のローランだ、とレーモン・ジャン。心なしかその声は少し沈んで聞えた。ぼくは多くを聞かず、すぐに話題をかえた。なぜなら、ローランにまつわる悲しい物語のあらましを、推測することができたからだ。

話は数年前に遡る。兄のレミほど政治的関心を示さず、むしろ温和な青年と思われたローランは、魔がさしたというのか、いつしか麻薬を試みるようになる。いく度かの立ち直りへの本人や家族の努力と願いも空しく、彼の身心は極度に蝕まれていき、ついに1980年晩秋のある日、自らの頭にピストルの弾丸を撃ち込んでしまう。まだ27歳の若者だった。

ここは、この事件の詳しい経緯を語る場所ではない。それ故、もしこの事件に関心を示される向きがあれば、まずはレーモン・ジャンが公刊した物語 *L. (Seuil, 1982)* の一読をお薦めするにとどめたい。自殺した青年を主人公とし、その苦悩にみちた回想を1人称形式で語ったこの作品は、現代という時代のもつ暗い不幸な側面のひとつを、われわれに教えてくれるであろう。あるいはまた、この事件がレーモン・ジャンにどれだけ深い傷跡を残したかを知りたいければ、今春彼が公刊した半自叙伝 *Belle clarté Chère raison (Desclée de Brouwer, 1985)* を併せてお読みくださればよい。「苦悩」と題されたその第5章には、不幸な息子の死の衝撃を癒やすべく、カンヌの沖合に浮ぶレラン島のシトー派の僧院の片隅で、ひたすら沈思するひとりの父親の姿とその心境が、淡々と語られているからだ。

「プロヴァンスふうスープ」で始まったこの日の昼食は、決して豪華なものではなかった。しかし、いずれも夫人の手になる心のこもった品々ばかりだった。さらに夫人は、日本のこと広島のことなど適当に質問をはさむことで、食卓の話題を絶やささない気配りを見せた。ぼくがフランス語のまずさから答えよどんでいると、そんなに質問すると客人は食事ができないではないか、とレーモン・ジャンが助け舟を出してくれる。

たまたま話題がエク스에勉強に来ていた日本人学生に及んだときのことだ。

恋人の女性を殺害し、その人肉を試食して世間を驚かせた例の日本人学生、唐十郎が彼を主題にした小説を書いて評判にもなったあの男が、じつはエクステフランス語を勉強していたことがあるという。初耳だっただけに、ぼくは驚いた。——長女のマリオンは彼と知り合いでしたから、あとから考えるとゾツとしました、と夫人。その表情が真顔だったので、もちろん、ぼくも大きくうなずく。しかし、そのとき、同じ日本人だからというだけの理由で、なぜか自分も食人種の仲間とみなされているような変な気分にとられる。そういうぼくの内心の困惑を察してでもしたかのように、あなたが彼の仲間だなんて思っていますよ、と夫人が言ってくれる。食卓の一同が笑い、思わずぼくもほっと一息つく。

このときの情景は、アルチュセールのような頭脳を持ち主でも、精神の障害がつかれば自分の奥さんまで殺してしまうのだから、気の毒な人はどこにでもいるよ、と呟いたレーモン・ジャンの姿とともに、いまもぼくの記憶に鮮明である。

食後の小憩が終わると、まず彼はぼくの帰りの予定が18時12分のエクスの列車であることを確かめ、では、それまでにセザンヌゆかりの地を案内しておきたいと言って、愛車のフィアットに再びエンジンを入れた。車はいったんエクスの町へひき返し、そこから東の方向にのびる狭い県道に入る。やがて車はル・トロネの村を通り、ジャ・ド・ブッフオンの近くをゆっくりと走る。なおしばらく車は快調に走り続けて、真上にサント・ヴィクトワールの頂きをのぞむ地点まできて停止する。

標高約1000メートルの石灰岩から成るこの巨大な山塊は、岩の隙間にかろうじて根づいた灌木を除けば、ほぼいたるところ、むき出しの裸岩でおおわれている。頂上一帯は灌木すら見当らず、太陽の光をあまねく吸いこんで白一色だ。その白さと抜けるような空の青さが、この山頂のシルエットを際立たせている。ところが中腹から下方にかけて、白い岩には微妙なあわいバラ色が線状にさし始め、どこか女人の肌を思わせるなまめかしさを加えてくる。そして、ぼくが立っていた車道近くまで視線を下げると、そこはまばらな松林となっていて、その下に赤褐色の地肌がのぞいている。不毛の荒野のように人を近づけぬ頂上の厳しさと、触れてみたくなるような肉感的な中腹部の美しさとが渾然とした不思議な山だ。

絵心のないぼくのような人間でも、いくらか観想的になる。晩年のセザンヌについてよく引き合いに出される「印象主義をもとに美術館の芸術のように堅固なもの、持続するものを作りたい」と語ったこの孤獨な画家の言葉が思い出されてくる。ときに、一陣の強い風が松林の梢を激しく揺する。ミストラルだろうか。

後髪をひかれる思いで、再びエクスへの道をとる。車中のレーモン・ジャンが話しかけてくる。セザンヌに興味があるか。大いに。それはいい。いまセザンヌについて書くよう頼まれているので、出版したら早速届けよ。いつしか別の話題に移る。このところエクスの大学では韓国の学生が増え、ヴェトナムの学生はほとんど見かけなくなった。彼が *Le Village* (Albin Michel, 1966,) を書いた頃と違って、解放後の民衆は不幸ではなくなるはずだったのに、いまだにポートピープルがなくならないのは残念だ、等々。ぼくにも彼の滞在の数年後に、日本語教師としての一年余のサイゴン経験があるだけに、東南アジアの一角を占めるこの半島については話がはずむ。よくも悪くも、とレーモン・ジャンは喋り続ける。マグレブ諸国、インドシナ三国など旧植民地の過去と現在に、フランス人はまったくの無関心ではおれない。断ち切れない何かが残っている。アルジェリアとカミュ、サイゴンとデュラス。サン・ジョン・ペルスだって西インド諸島の生れだからね。ぼくはうなずく。日本にもいくらか似ているところはありますよ、『アカシアの大連』を書いた詩人作家の例が示すように、郷愁とか出自へのつよい関心とかとからまって……

エクスの町に戻ると、残念ながらもまだ夏休み中なのでせめて外観だけでも、とエクス大学文学部のキャンパスに彼は車を乗り入れた。彼の研究室があるという10階近い建物の1階を覗く。学生のいないがらんとした広い空間に、ぼくたちふたりの足音だけが妙にかん高く響く。ガラス張りの中2階の部屋から、ひとりの男がレーモン・ジャンに手をあげて合図している。コンシエルジュらしい。今度来るときは学生のいる時期を選びなさい、と彼。もう一度来れたらいいのですが、とぼく。

夕方5時近く、ぼくは再び丘の上の鳩舎でジョルジュ夫人から紅茶をふるまわれていた。夫人はプロヴァンス地方特産の小さな土人形サントンをぼくの妻への土産として準備してくれていた。前年の10月、広島を訪れたレーモン・ジャンにぼくが贈った日本の民芸品へのお礼だそう。レーモン・ジャンは、

小説ではない近作を二冊、この日の記念のために用意してくれていた。そのひとつは、平易な美しい言葉で彼の住む町を語った小品 *Aix en Provence* (Eds. Alain Barthélemy, 1981)。いまひとつは、若い気鋭の写真家ジャン＝ノエル・ド・スワの協力をえて、彼の生れた町マルセイユへの賛歌をつづった *Le Piéton de Marseille* (Eds. A. C. E. 1984)。ぼくは心から謝辞を述べた。

エクス駅を出た帰りの列車の窓から、ほんの数瞬、夕景の中のサント・ヴィクトワールが見えた。人の一生という時間の中の一日は、おそらくこの列車からかいま見たセザンヌゆかりの山のように、束の間の出現にすぎないのかもしれない。しかし「出現」を表わすフランス語が、はしなくも同時に「亡霊」とか「幻」を意味するからといって、決してそれは幻ではないはずだ。少なくとも、ぼくはそう信じたい。1984年9月8日。この日が雲散霧消する幻となって、ぼくの記憶から消え去ることはまずないだろう。